



シュンギク

(10アール当り)

時期	方法	資材と施用法
地力作り [元肥]	右記を同時に全面に散布して均一に耕やし、ウネを整地する。 播種までに、なるべく長く日数をおく事。 (理想的には20日以上)	<ul style="list-style-type: none"> ●ラクトバチルス600g →保水性・排水性がよく、肥沃な地力を作る。 ※一作を終えると土壤微生物群も消耗しているので、作付けごとに菌を投入して、堆肥を土ごと醗酵させる事を推奨。 ●堆厩肥500kg以上(年間2トンほど) ●硫安60kg (もし通常の複合肥料ならN:14kg程度で、特に日数をおく) ※カルテック農法を継続している場合、ハウスでも無機肥料成分の残留が少ない(EC:0.2)ので、減肥しない。ただし前作がカルテック農法でなく、チッソが特に多量に残留している場合(EC:0.5以上)は、チッソ施肥量を2/3程とし、カルシウムを増量する。 ※地力作りから播種までに日数の余裕が無い場合は、上記の材料を別に予め積み込みして醗酵させたボカシ肥の施用を推奨。 ※何れのやり方でも、播種時には土壤EC:0.2前後とする。 ●畑の大将<青> 60kg(前後) ※土壤pH6.2程度となるように量を増減する事。 ※カルシウムが効いたシュンギクは、根が白くキレイで、葉が厚く、ツヤがあり、特有の旨味と香りが強く、鮮度を長く保つ。 当然、カルシウムやビタミンC、β-カロテンも豊富。
播種時	播種・覆土後の灌水の時	<ul style="list-style-type: none"> ●根っ酵素500倍液 →出芽と根張りを均一に揃えて促進。 ※通常、播種後に十分に灌水し、この時10アール当り2ℓ程度を与える。希釈倍率は500倍(以上)でだが、水量により適宜でOK。2~5日で揃って出芽し、萎黄病にも強くなる。 ※これ以後は灌水しない。もし土が乾き過ぎたり、根張り・生長が不均一で良くない場合は、調節の意味で中期(15日)までに一度、根っ酵素を混ぜて灌水する。この時はすでに葉があるので、希釈倍率は500倍(~1000倍)とする。

(10アール当り)

時期	方法	資材と施用法
生育途中の調節	葉面散布 2つの液の葉面散布を適宜、使い分けてコントロールする。	<p>●根っ酵素500倍液を葉面散布 →通常、本葉展開後に散布し、根張り・生長を強く促進。</p> <p>※以後15日経過したら、2度目の散布をするのが効果的。 ※ただし何時でも、生長を進めたい時には酵素液を葉面散布。 ※特に秋蒔きの場合は、初期にしっかり根を作って生長させる。 ※低温で生育が停滞し、花芽分化(抽ダイ)も心配な時は、酵素液散布。 (抽ダイさせないためには、初期に肥料過多にせず、根の力で生育を進める事。中盤以降に根を衰弱させない事。)</p> <p>●花咲くCa液500倍を葉面散布 →本葉2枚展開以降に散布して、生育の引締め・病害対策。</p> <p>※以後15日経過したら、2度目の散布をするのが効果的。 ※ただし何時でも、チッソ過多や、葉が薄く、広く伸びすぎ、軟弱な時、早すぎる生長を締める時には、カルシウムを葉面散布。 ※特に春蒔きの場合は、徒長させないようにカルシウムを優先。 ※寒期にかかる前に散布しておくこと、寒害に強くなる。 ※原則として上記2種の葉面散布は3日以上あけて交互にする。 ※もしチッソ肥効が少なすぎ、葉色が薄く、生長が悪い(ただし根は強い)場合は、アミノ酸500倍で葉面散布する。</p>
仕上げ	収穫前7~2日、葉面散布	<p>●花咲くCa液500倍 →葉を厚く充実させ、糖度・旨味・香りを増し、鮮度を長く保つ。</p>